



— 巻 頭 言 —

さて どうするこれから！

監 事 松 本 政 典

鳥からの攻撃を想定していたところ、伏兵の豚からの思わぬ攻撃を受けて、対応に混乱が生じたが、比較的毒性が低いとのことで、まずはひと安心といったところでしょうか。

小生は、アラ還を過ぎ前期高齢者の仲間入りをし、この3月末日をもって43年間の熊本大学における教育・研究生活に終止符をうち、第3の人生を歩き始めました。この43年間の教育研究の中心は核医学関係でしたが、この間にすべてのものが大きく変化してきた。年配者が良くやることと思うが、小生も、まずはこの間の変化をふり返ってみる。

まずは、核医学画像機器の変遷について、最初にお目にかかったイメージング装置は検出器移動型のシンチスキャナーであったが、やがてガンマカメラが出現しアナログからコンピュータの導入によるデジタル化へと改良され、さらには SPECT の開発、PET の出現、そして SPECT/CT、PET/CT と飛躍的な進歩を遂げてきた。また、コンピュータの導入とその飛躍的進化にともなって、核医学データ処理技術も大幅に開発、改良が進み、画像データの精度向上、各種補正法の開発、さらには動態機能情報の解析法の開発、改良による脳機能や心機能等を代表とする各種臓器・器官の機能の定量評価法の確立がなされてきた。

この40年間で、診断情報としては、シンチスキャナーや初期のシンチカメラのやっとな画像として捉えることが出来しかかも静止画像の時代から飛躍的進化を遂げ、静止画像はもちろん生体機能や代謝情報を高い定量性を持つ鮮明な画像として提供できるようになった。

このように、システム、情報処理、診断情報の定量性や精度等が飛躍的に発展、進化してきたが、完成域に達していると云えるのはまだ少ない。これからも関係者の活動、活躍により更に発展、進化していくであろうが、X線 CT や MRI が台頭してくる中、さてこれからどうなっていくのであろうか。

一方、医療技術者養成は、専門学校教育から、医療技術短大教育中心となり、現在は念願であった大学教育中心となり高度な教育体制が実現し、さらには大学院教育も行われるようになってきた。

また、免許資格制度は、診療X線技師から診療放射線技師へと変わり現在に至っている。本学会ではさらに核医学専門技術者認定制度を設け核医学専門技術者の認定を実施してきた。これは、核医学技術に関する高い技術と知識を有する技術者であることの認定であり、その目指すところは診療放射線技師等医療技術の免許にさらに積み重ねる専門性の高い技術者の認定にあった。そして現在、関連4団体による核医学専門技師認定機構の設立と核医学専門技師認定制度へと発展し、公的に認められる制度となり、所期の目的実現へと進みつつある。

診療放射線技師の高学歴化、核医学専門技師制度の実現はなされたが、核医学専門技師の医療界における認知や位置付けはこれからである。さて、これからどうする。関係者の活躍を期待したい。

本学会は、昭和56年に研究会として発足、平成2年に学会と改称し（第10回大会）、本年4月に念願の法人格（特定非営利活動法人）を獲得した。また、学術総会開催についても、懸案事項であった日本核医学会との合同開催に踏み切り、昨年10月に第1回目の合同開催が成功裏に実施された。本学会としては、理事会、事務局を中心とした活動によりこのように大きな変貌を遂げ、新しい道を歩き始め、その責任もますます重いものとなってきたが、さてこれからどうする。小生も、監事としてももう暫く見守るとともに、微力ながら貢献できればと考えている。

最後に、小生もこの約40年の間、これらほとんどの事柄に関係し、及ばずながら微力を尽くしてきたが、退職後3ヶ月を超えようとしている。まだまだ、落ち着いた日々を送っている。心身・頭脳共に老け込まないように、さて、どうするこれから！